

革新的な高解像度裸眼立体表示とプロトタイプ医療応用の実現（平成 29～令和 2 年度）評価集計表

| | | |
|---|-----------|-------------|
| 予算適正執行の評価 | 評価者人数 4 人 | 平均点 48.75 点 |
| <p>(コメント)</p> <p>研究の特性上、多くの機器・物品を必要とする。研究申請時の購入予定品と実際の導入物品とは乖離があるようであるが、ほかのプロジェクトの進捗状況を踏まえた機器の有効活用はむしろ望ましいことであるといえる。全体として、この程度の使途変更は全く問題ないレベルといえる。</p> <p>研究計画調書に記載した機器とまったく同じものを購入しているわけではないが、研究目的に沿った支出である。また節約した経費を、さらに研究の質を高めるために支出しており、適正な執行であると考えられる。</p> <p>特に減点するところはありませんでした。</p> | | |
| 研究実効性の評価 | 評価者人数 4 人 | 平均点 43.75 点 |
| <p>(コメント)</p> <p>全体としては順調に進捗したと考えられる。運動視差提示のレイテンシーの低減の部分のみうまくいかなかったようである。後から振り返ってみれば、提案書に書かれている方式に潜む技術的困難さ（観察者の顔位置を低レイテンシーで高精度に特定するということが、研究者側の技術の問題というよりも購入する機器側の問題と思える節もあり、ある程度事前に予測できたはずではないかという懸念もややある。ただし、限られた人員・工数の中で見れば、論文としての成果公表、受賞などの成果も含め、全体としては計画通りの研究が進んだと理解すべきである。</p> <p>本研究で開発された機器は、研究計画書で予定されていた、輻輳調節矛盾の低減、運動視差提示のレイテンシーの低減、4K の高精細、同時に 2 人での観賞、消費電力の低減を達成している。さらに、その効果を評価している。</p> <p>内視鏡手術への超多眼表示や高速な運動視差提示の導入効果についても評価を行うとともに、CT 画像のデータ処理ソフトの開発などの成果をあげている。</p> <p>(2)の目的が達せられていないとの自己評価ですが、その代わりにの評価を十分挙げておられるため、上記の点数とします。</p> | | |